

《委員意見》

ちよだアートスクエアへの期待

産業人文学研究所 代表理事

門田 けい子

古い建物の用途転用が時代の流れとは言え、学校という限られた空間と予算のなかで、理想的な文化芸術拠点作りの議論は試行錯誤の連続でした。そのような中で、ハード面についてはある程度の改修プランがまとまり、提言書までに至れたことは良かったと思います。

しかし、限られた会議の時間内では、命題の「ちよだASらしさ」や、千代田区が目指すビジョンに適うか否かなどの議論は不十分であったように思います。

まずは、ハードの改修案が決まり、そこから、次に、ちよだASに適った文化芸術活動の具体的な入居者などが検討されると思いますが、その「公募→選考→入居→活動」など、今後のASの方向付けに影響する重要な作業でもあります。現在、国内では1600件を超えるアートNPOがあると言われています。アートNPOの殆どが、アーティストたちの自主運営で執り行われており、その団体の大きさ、質、活動種目はさまざまです。最終選考に残った入居者と貸し手のASとが合意に至ったとしても、多様な組織が同時に入居し、さまざまな活動を展開する事で、ちよだASの特性が希薄になるのではと危惧いたします。

そこで、今後、下記の取り組みについても期待いたします。

■ちよだAS自主事業

可能であるならば、開催当初の2、3年は、ちよだASスタートにふさわしく、社会的なインパクトを与える、自主事業の予算化もご検討ください。千代田区民にとってわかりやすい事業を精査し、ある程度の予算を付け、事業始動のファンファーレとして人々を呼び込みます。また、多様な入居団体全体を引っ張り上げるムードメーカーとしての役割も大きいと思います。

■アーティスト・イン・レジデンスについて

一時、会議資料に「レジデンス」や「アーティスト・イン・レジデンス」という活動名の記載がありました。宿泊場所の手当てが無い活動に使う用語としては不適切と思い、名称の変更のご検討をお願いしました。しかし、今、国際社会は多文化共生時代となり、様々な文化的軋轢を避けるための叡智が求められています。アーティストたちの他国、他地域での表現活動は、ゆるやかな文化翻訳を行うとして、現代社会の重大な役割を担っているとされています。是非、滞在型活動の可能性を引き続きご検討頂きたいと思います。

ちよだアートスクエアへの期待

万世橋地区町会連合会長

小暮 徹士

千代田区では平成17年1月に千代田区文化芸術プランを策定し文化芸術の魅力ある街作りを推進している。ちよだアートスクエア構想はこのプランの重点プロジェクトとして旧練成中学校を活かし区に在住、在勤、在学及び区に集まる人々の生活の質を高める事を目的とする構想である。

千代田区としては北のはずれではあるが、賑わいを見せている秋葉原に近く交通の利便性も良い又、練成中学という地域の人々に親しまれた所でもある。

ここに生活の質を高めるための施設を造り皆に楽しみ親しんでもらおうというのである、誠に素晴らしい構想である。ここで区は、まさに千代田区の冠称を付けるにふさわしい施設を造ってほしいと思う。

予算的制約があるとは思いますが長期使用を考慮して予算を惜しみ中途半端なものを造るのは賛成しない。実施委員会の提言は最低限の提案である、千代田区として新しくこれだけの物を造る事を考えればコストに見合った以上の施設を造る事が出来ると確信する。

「ちよだアートスクエア」へ

日本芸術文化振興会 国立劇場

杉山 登志子

「ちよだアートスクエア」は長期なものでやっていただきたいと思います。地域の住民が気楽に出入りできる場所でその中で、レベルの高い講習会があったり、一流の芸の発表の場であったり、また新しい芸能の発信をしたり……。長い期間を想定し少しずつ積み重ねて地域への周知を定着させそれを区全体へまた全国へと繋げていくには、長い年月が必要となっていくことと思います。その中で「ちよだアートスクエア」がブランド化して老舗のようになっていくことが望ましいと考えます。

せっかく良い場所、良い環境があるのですから 100 パーセント利用し、費用もかかる訳ですから「形だけやりました」ではなく形を持続していけるようなものとしたいと思います。芸術や芸能は短期では定着していかないものと考えます。「あっ！あそこに行けば何か見られる。」「あそこに行くと必ず楽しめる」そんな空間であってほしい。

実施委員の方々の素晴らしいプランが沢山ありましたが全部をやり遂げるまでいたりませんでした。が長期的な計画で実行できたらとても良い空間ができていくのではないのでしょうか。10 年、20 年と「ちよだアートスクエア」が続きどのように変貌していくのか楽しみにしたいと思います。

「ちよだアートスクエア」への期待

東京都江戸東京博物館 館長

竹内 誠

○「ちよだアートスクエア」は、まず地域の人々に愛され親しまれることです。

旧練成中学校を「ちよだアートスクエア」として再活用するにあたり、ここで学び育った卒業生たちや地域の人々の学校に対するさまざまな思い出があること、その心情を大切にすることを原点にしたいと思います。そのため、校長室や或る共有スペースなどに、この場所はかつてこういう学校だったということを示す展示が必要です。それは、歴代校長の写真とか卒業生の集合記念写真とかを掲示するという類のものではなく、たとえば卒業生や地域の人々から、学芸会・運動会・文化祭などの楽しい思い出の一コマ(写真)を提供してもらって展示する。展示は常設でなくても、ギャラリーなどの臨時展示でもよいかもしれません。

○その原点を大切にすることから出発すれば、建物をかなり改修しても地域の人々に理解して頂けるでしょう。実は、学校というハードのイメージをそのままストレートに継続すると、文化芸術の新しい交流・創造の場としての「ちよだアートスクエア」になじみにくいような気がします。「装いも新たに」という文化芸術施設を目指すべきでしょう。

○地域との連携では秋葉原が間近ですので、それとの連携がこの「ちよだアートスクエア」の将来に大きな影響を与えそうです。

○活動スペースの入居者として、いろいろ考えられますが、「谷根千」のようなタウン誌やフリーマガジンなどの編集室として活動スペースを提供することも一案だと思います。これらは現実的に文化芸術に関する情報発信の役割を果たしています。

○事業者がおこなう事業内容、とくに運営組織と入居者がおこなう契約内容などはさまざまなケースがあり、より詳細に詰めておく必要があると思います。

○「継続は力なり」と申します。短期的ではなく、長期的観点に立って、この「ちよだアートスクエア」が成功することを期待しています。

旧練成中学校における、ちよだアートスクエアへの期待

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち 代表
堤 康彦

私が3年前から事務所を構えている、にしすがも創造舎は、閉校となった中学校を再利用(転用)した施設で、自治体(豊島区)との協働のもと文化芸術創造支援事業を行っている。その経験から、学校という施設は文化施設として、美術館や劇場にはない可能性を秘めていると感じている。特に公立の小学校や中学校は、たとえ閉校になったとしても、地域住民にとってかけがえのない場所であるとともに、親しみやすい場所で、コミュニティ拠点であると言ってよい。その学校の卒業生はもちろんのこと、そうでない住民にとっても、学校は「記憶」のたくさん詰まった場所であり、子どもたちがかつて学校生活を送っていたにのこりのようなものが残っている。そして閉校後の活用方法は、おおっぴらにはもの言わぬ地域住民もとても注目している。だからこそ、とかく自分には関係ないと思われがちな芸術文化を扱う場所として、学校は面白いのである。美術館や劇場のような特別な場所ではなく、より身近な存在としての学校。アートと社会をつなぐ場として期待したい。

アートが社会とつながる装置として、社会に開かれた施設として、ちよだアートスクエアが機能することを期待するが、そこで様々な事業を展開する際、「芸術家」と「子ども」を核としてはどうだろうか？

日々新しい表現を生み出すことに邁進する現代の芸術家は、独自の視点を持っており、社会の様々な事象を鋭い感覚で切り取り作品化する。その創造プロセスにおいて、ちよだアートスクエアならではのものが意識され、地域住民とつながりつつ、プロジェクトが普遍化することを期待したい。そこでは、音楽や美術といった既存のアートジャンルを超えて、むしろ環境、福祉、教育、子育て、まちづくり、食育など多様なテーマと結びつけて考える芸術家が集まるといい。彼らの力を信じたい。

また、子どもが積極的に来館し参加・参画するちよだアートスクエアにしたい。子どもたちがアートを通じて、新しい自分を発見し、新たな他者との関係をつくる機会を提供する。一方、「子どものため」という思いから、親や親以外の地域の大人たちもちよだアートスクエアに関わるきっかけとなる。子どもの主体性を尊重しつつ、子どもがいることで大人たちも変化するような、例えば三世代が交流する機会を設けられるといい。子どもは、大人からすると思ひもかけないアイデアを出したり、行動をすることがあるが、そんな子どもたちと芸術家を出会わせることで新しい何かが生まれてくることも多いと思う。

私は、たまたま閉校になる最後の年に練成中学校に約10日間通った。プロの演出家を連れて、最後の練成祭(文化祭)での演劇作品を生徒たちとともにつくるためだった。体育館の舞台での生徒たちの熱演を忘れることはできない。将来彼らが大人になって、ちよだアートスクエアを家族で訪れたとき、子どもに自慢できる場所になっていることを期待したい。

ちよだアートスクエア構想について

非営利芸術活動団体コマンドN 代表

東京藝術大学準教授

中村 政人

「土地に残された過去の記憶、場所のもっている特性、つまりは土地の可能性のことをゲニウス・ロキ (Genius Loci) というが、現代においてこそ、このゲニウス・ロキを都市のなかに発見する力を求められている。」(鈴木博之著/日本の近代)

ゲニウス・ロキとは、その場所の歴史を背景に培われていく固有のアイデンティティと言い替えることもできます。東京の中心、日本の中心に位置する千代田区において文化芸術的活動を育成する際に、ここであるゲニウス・ロキという概念がとても重要です。「旧練成中―秋葉原―千代田―東京―日本」と伸縮させてこの土地/場所を捉えた場合に、どの領域においてもその中心性ゆえのゲニウス・ロキが見え出す。秋葉原/神田として、千代田区として、東京/日本として、それぞれのゲニウス・ロキがレイヤー状に重なり合い一つの地場を形成しています。ちよだアートスクエア構想においてこのゲニウス・ロキを「発見―育成―伝達―継承」していくことは「旧練成中―秋葉原―千代田―東京―日本」という領域においての固有なアイデンティティを「発見―育成―伝達―継承」していくことといえる。

現代アーティストや人間国宝のような存在からアートスクエア区民まで、この場所のゲニウス・ロキを「発見―育成―伝達―継承」する様々な創造的な活動を行うことによって、地域から発する本質的な文化、芸術という活動が生まれます。つまり文化・芸術と言われる前の、様々な小さな創造的活動が、固有のアイデンティティとなるまでのプロセスを丁寧にサポートしていく事。アートスクエア構想は、このプロセスをサポートすることによって、千代田のゲニウス・ロキを新たに構築するプログラムといえます。

アートという個人の創造的活動は、社会活動と連動・シンクロしたときに街の創造力となり、経済的論理を越えたアイデンティティを見つけ出します。ちよだアートスクエア構想は、その意味で、多様な地域(海外も含む)の創造的活動が交差するノードとなり、個人の創造力と街の創造力が相互にシンクロしあうプログラムを提供する、新しいアートセンターとして社会的に機能していく必要があります。

＜ちよだアートスクエアはメディアそのもの＞

ちよだアートスクエアに、どのようなアート活動が展開され、どのようなアーティストを迎え入れることが有効なのか、委員会ではさまざまな論議がなされたが、はっきりしていることは、アーティストのためだけのちよだアートスクエアではないということだ。その内容は、いずれ運営委員会の目利き能力や、実行組織のマネージメント能力に委ねることになるが、ちよだアートスクエアは、まず地域の子供、母親、父親、お年寄りをはじめとする住民、商店業者、企業に勤め、学校で学んでいる多くの区民のためにある。そして彼らがアートに触れ、創造力を引き出し、新しい発想を得て、柔らかで暖かい心や関係を取り戻し、硬直化した人間関係や社会の仕組みを解きほぐし、社会を変え街が活性化するためにある。アートは人々を自由に蘇らせ、新たな価値を生み出す力を持っている。アートが特別で特殊なものでなく、誰でもが人生を豊かにするために必要なもので、多くの人にちよだアートスクエアを利用してもらうことこそが、このちよだアートスクエア構想の大きな目的だ。つまりちよだアートスクエアは、単にアートを見るだけ、鑑賞するだけの一過性の場所ではなく、誰もがアートに触れ、生産し表現することができ、気軽にアートに参加できる「自分が活性化される場所＝メディア」であることだ。このようにちよだアートスクエアそのものをメディアとして捉えることにより、地域性を超え世界に通用する、千代田区発の文化の発信基地としての役割を果たすことができる。自分自身が変わる媒体になるという所なのだ。

＜ちよだアートスクエアを形成していくスタイル＞

メディアとしてのちよだアートスクエアは、形成していく過程をすべてオープンにしていくことにより成り立つ。参加者とともに作っていく方式である。ちよだアートスクエアのマネージメントは、目的と意義や方向性がはっきり示され、一定のルールが守られていけば、その意義や目的に賛同するものや団体が積極的に参加し続け、コラボレーションしていくことにより運営される。行政は活動の持続性をできる限り支援していく役割がある。

地方の文化活動の出先機関やキュレーター、各国の大使館の文化部等との協同、アーティストや学校、出版社やメーカーなど企業との連携を図り、さまざまなノウハウを組み合わせながら、学ぶ、相談する、制作する、商品開発を行う、発表するなど、その活動過程もすべて明らかにしていくことを重点に行い、みんなでワクワクハラハラしながら創っていくライブ方式である。

＜最近の実践例とちよだアートスクエアの可能性＞

私がかかわるアートジムは、今、国立博物館で開催されている「大ロボット博」に参加している。日本の最先端技術を駆使したロボットが多数展示されていて好評だが、ロボットというと、その機能や科学的な性能のほうが強調整され、動かすほうが主体で、形やキャラクターや表情にあまり興味を

もたれないようだが、そこにアートで参加しているのだ。私たちは、ロボットを見るだけでなく、ロボットになろうというコンセプトで、大学生やアーティストが造ったロボットのパーツの塗り絵を用意し、それを子供たちが色を塗り身に着けて、自分自身がロボットになるという視点を提供したものだ。このコーナーは大好評で科学博物館の館長からも自らが、このコーナーの拡大提案をされたほどだ。ある日、気難しい教頭先生が小学生を団体で引率されてきた。このコーナーに小学生が群がった。しばらくすると教頭先生が自分で縫ったロボット仮面をつけてロボットの真似をしてその場を歩き回った。それを見た子供たちが大騒ぎとなり、「教頭ロボットだ！」と口々に叫んで、その場が暖まり和んだ。子供たちと先生の関係が一気に縮まった。

アートは子供の創造したいエネルギーをごく自然に発揮させ、彼らの目を生き生きさせる。アートを通して大人との関係が蘇生される。その具体例を挙げてみた。

ちよだアートスクエアは、常に外部との関係付けを積極的に行い、ちよだアートスクエア内だけで自己完結するのではなく、参加するすべての人々団体との協同作業を公開し、それらの活動を伝え切ることによって、集客力を増し、その可能性をさらに大きく広げていくことになろう。

このちよだアートスクエアが、千代田区の文化政策の大いなる先駆的な試みとして成功し、日本の経済一辺倒のモノカルチャー的発想の中で、大きな対抗軸として「文化の力」を高めることに貢献することができれば、千代田区が求心力を持ち、人口も増え社会に活力を与え、結果として経済効果も生んでいくことになる。行政は文化力向上のため惜しみなく資金を投入すべきである。

ちよだアートスクエアの具体的活用案

日本大学芸術学部 音楽学科教授
峰村 澄子

旧練成中学校(ちよだアート・スクエア)では千代田区の文化・芸術の発信場所として位置づける。

A)建物についての要望は次の五つです。

- 1)バリアフリーの設置
- 2)地階から屋上までエレベーターの設置
- 3)インターネットの充実
- 4)安全設備とセキュリティを万全にする(特に 2F,3F)
- 5)公園からの入り口は、出入り自由な感じにする。
- 6)部屋には水道などの設備を

B) 地階から 1F,2F,3F 屋上までの使用方法について

1) 1F<運営事務所>

2) 千代田区の伝統・文化を一瞥できる場所(一室)

- *お祭り・各種イベント(催物)等
- *印刷技術の発達<写真や機会>
- *本屋街、電気街についての案内
- *史跡や公園についての案内
- *その他

3) 新しい芸術を発信する小ホール

- *舞台での演劇、ミュージカル、音楽会、映画

4) ギャラリー

- *展示スペース 絵画・彫刻・写真等(廊下や一室、玄関ホール、彫刻は屋外も可)

5) 1F と屋上で

- *誰でも利用できる憩いの場所(レストラン、屋外から続くカフェテラス、1F)
- *園芸(生産野菜などの販売店、屋上)

6) 半地下において

- *音楽や演劇など音の出る練習場所とする

7) 2F,3F

- *創作場所、芸術系の事務所、短期レジデンスなど、例えば 2F(外国大使館、道府県用として。3F(一般の芸術活動用に)

- *上記の部屋は 1)一週間単位 2)一ヶ月単位 3)半年単位として貸し出す。

原則として芸術、文化、学術、歴史、伝統芸能に関係のある個人、団体に貸す。

- *喫煙は原則として屋外で、各階に屋根またはテント付きのテラスを用意する。室内では換気扇付きの部屋のみ可とする。